

【作文】 中学生の部
最優秀賞 普通とは何か

大東中学校三年 大橋 颯都

僕には四歳離れた弟がおり、また五歳離れた従弟がいる。三人は兄弟のように普段過ごしている。従弟は祖父父母の家に住んでおり、僕の家と近所なので、毎日のように顔を合わせている。特に弟と従弟は一歳違いなので、一緒にゲームをしたり、バスケットをしたり仲よく遊んでいるが、時には激しく衝突して大喧嘩することもある。二人がよく似ている所は、一度カツとするとどちらも引かずに取っ組み合いになることだ。僕と従弟と似ている所は、くだらないことですが、くよくよしてしまう所だ。三人は少しずつ似ている所があるのだなど日々感じていた。従弟の母である叔母は、従弟が三歳の時に三十八歳という若さで、病気で亡くなってしまった。従弟の中には母親の記憶が全くない。僕もほんの少し叔母の記憶のかけらが、断片的に残っているだけだ。もちろん弟にも記憶は残っていない。思い出して話題にすることさえできないのは、とても悲しい。叔母が亡くなり、それから祖父父母が従弟の父母となった。従弟の父である叔父は、仕事柄転勤が伴い、毎日一緒にいることができない。週末だけ従弟と過ごしている。

ある日、従弟が学校で友達と喧嘩をした。そして、相手に怪我を負わせてしまった。従弟も無傷ではなかったものの、学校から連絡があり、祖父父母が従弟を連れて相手の自宅へ謝罪にいかなければならぬ状況となった。三人は深々と頭を下げ深く謝罪したが、思わぬ言葉をかけられ、沈んだ表情で帰宅した。「お宅は普通の家庭ではないので・・・」と相手の母親から言われたそうだ。僕はそれを聞いた時、怪我を負わせてしまったことはもちろん悪いが、あまりにもその言動が腹立たしくて仕方なかった。この憤りをどう自分の中で消化すればいいのかわからず、ずつともやもやし続けていた。普通の家庭の定義と

は何だろう。実の父、実の母と常に一緒に暮らすことができる家庭を指すのだろうか。相手の方が言いたかったことは容易に想像できた。母親の愛情が足りなくて、乱暴に育つたのだと言いたかったのだろう。そう思うと悔しくて胸の辺りがしめつけられる気がした。祖父父母は、僕の母と叔父を育て上げた後、高齡にも関わらず二度目の子育てを頑張っているし、叔父は従弟に何かあったときはできる限り従弟の元に帰り、従弟の側にいる。母は、祖父父母から相談を受けた際には真剣に一緒に従弟のことを考えている。多くの大人から愛情を注がれ、兄弟のように僕たちも一緒に過ごしている中、従弟は母親がいないうちに寂しさや苦しさを訴えてきたことがない。

いろいろ考えながら、母の意見を聞くことにした。自分の考えも聞いてほしかった。母は、少し時間をかけてゆっくり話をした。

「相手の方の普通は、全ての家庭に当てはまるものではないと思う。私達の家の場合、この現状の中、子供達三人がいろいろあっても健やかに過ごしている。苦しみや悲しみ、喜びや嬉しさを共有できる唯一の場所であり、寄り添い合い、お互いに大切に思い、誰かに大変なことがあった時には、力を合わせて乗り越えられるのが家族。それが私達の家族の普通。他の誰かが普通ではないと言ったとしても、胸を張って生きていけばいい。」

母の言葉を聞いて、ぼくはもやもやした気持ちで暗れた。僕も学校や塾等しんどいこともあるけど、相談できる場があることはいかに尊くありがたいことかを痛感した。もし従弟が寂しい時は僕たちが、側に寄り添えばいい。僕は家族を守る大人になれるよう成長したい。自分の価値観で普通ではないと誰かのことを決めつけたり押し付けたりしたくない。僕にとつて最も大切な場所、それは家族であつて、僕にとつての普通なのだ。

優秀賞 言葉に責任を

河南中学校二年 酒井 萌杏

私は最近、ニュースで「誹謗中傷」という言葉を耳にします。では、なぜ私が「誹謗中傷」という言葉に注目したのかというと、今の時代SNSを利用することが増えてきて、気をつけなければ簡単に私自身も被害者や加害者になってしまう怖さがあり、他人事ではないと思っただけからです。便利な一面もあれば、使い方を一歩間違えれば犯罪に巻き込まれるなど思ってもいないことが起こりえる可能性があります。

最近でも、誹謗中傷に傷つけられた人が自ら命を絶つてしまったり、オリンピック選手までもが被害を受けたりしています。匿名ということを利用して、無責任な言葉で攻撃をする。匿名は個人情報を守るためのものであって、人を傷つけるためにあるわけではありません。

オリンピック選手に向けての誹謗中傷は、モラルが守られていないひどい内容でした。誰かが悪いわけでもないのに、自分の身勝手な意見を押しつけている人もいました。ニュースを見ていて、私も今コロナ禍で「なぜオリンピックを開催するの？」と思うこともありました。しかし、開催されることに私は反対しようとは思いません。また、メダルをとった選手にも心ない言葉がたくさん向けられたと言います。どうして日本代表として戦い、優秀な成績を収めた選手に向けて身勝手な意見を発信するのでしょうか。選手にとつては今までの努力を否定されるような事になり、最高のオリンピックが最悪なオリンピックになりかねません。これだけニュースで誹謗中傷のことを取り上げているのになぜ、いつまで経ってもなくなることはないのかと考えると悲しくなります。ただ、なくならない一つの要因としては、みんな見て見ぬふりをする傍観者だからというのがあげられます。私もそのうちの一人です。自分が何かを発信したら、自分が誹謗中傷の対象になるかもしれないという怖さがあ

り、なかなか勇気を出すことができません。誹謗中傷をしている人の中にも、このような考えを持っている人がいるかもしれません。

最近のネットは正しくない情報すら正当化され、被害にあう側に数えきれないほどの攻撃としてのしかかるのです。誰もが利用できるからこそ、責任をもって発信するべきだと思います。本当かどうかわからない情報を載せる人も、その情報を真に受けてしまう人も、そしてそれを広める人も、その言葉の重さを考えていないように感じます。私自身も言葉の重みを考えずに相手に言ってしまうたり、相手から言われたりする経験は何度かありました。発言する側は、それが相手にとって良いアドバイスになると思っていて、相手は気にくわなかったようで避けられてしまいました。私はその時なぜ避けられているのか分かりませんでした。そして、一週間後ぐらいに相手から「ごめん。」と言われて仲直りしました。今考えると、あの時「ごめん」を言うのは私の方だったんじゃないかと少し後悔しています。だから今は、「言動に気をつける」ことを日々意識しています。する側もされる側もそれぞれ理由があると思います。性格や個性も違うため、考え方や受け取り方も異なるのは当然です。だからと言って、誹謗中傷やいじめをしてもいいわけではありません。その違いを意見として捉えるようにできればそれが一番良いのではないかと思います。相手の気持ちを考えて発信することを誰もができれば誹謗中傷は起こらないはず。子供も大人も人種も関係なく、人として一人ひとりが自分の言葉の重さと責任を常に考え選ぶことが、人権を守ることにつながるのではないかと思います。少なくとも私は、そういう事ができる人間でありたいと思います。

入選 マイクロアグレッション

柏原中学校二年 梶谷 直弥

あなたはマイクログレッションとはどのようなものか知っていますか。何気ない差別的言動。発した言葉が思わぬところで人の心を傷つけてしまうことです。これを防ぐには社会全体の意識が大切になるのではないのでしょうか。

僕はこのマイクログレッションを学校の道德の授業で初めて知りました。その言葉だけ聞いた時は全くイメージできませんでしたが、先生からその例を聞くと少し自分のこととして捉えられるようになりました。

例えば、ブラジル人の子に

「サッカー上手なんでしょ。」

と言ったり

「これ中国人の真似」

と言いながら手で目をつりあげたり。このような言動・行動のことを指すのだそうです。僕はどちらも実際に聞いたことがあります。しかし、僕が聞いた時、その言葉に違和感を感じることはありませんでした。今になってから振り返るとこのような言葉はだんだんと相手の胸につき刺さっていき、人を苦しめるのだと見方が変わった気がします。

その中で、僕も小さいことではありますが似たような経験をしたことがあります。僕は家族の事情で幼稚園の年長から小学校一年生までの2年間、アメリカのノースカロライナ州に住んでいました。その時は現地の学校と日本人学校の2つの学校に通い勉強していました。夏休みには家族旅行をし、楽しい思

い出もたくさん出来ました。2年生の時に日本に帰国し、日本の学校に通うようになりました。日本でもたくさんの友達が出来ました。そんな友達に僕がアメリカから転校してきたことを教えると多くの友達に言われた言葉があります。「アメリカから来たの。英語話してみて。」初めの頃は何も思うこともなく答えていました。しかし回数を重ねると言葉の受けとめかたも変化していきました。あの友達はアメリカにこんなイメージを抱いているのだと。もちろん友達が嫌になったことは一度もありませんでしたが、不思議な気持ちになったことを今でも覚えていません。

僕は少しだけアメリカに住んでいたことがあるので、アメリカに対してその友達とは別のイメージを持っていました。僕がアメリカに住んでいた時は韓国人とエジプト人の子ととても仲が良かったです。毎日学校では一緒にいました。そんなことを思い返すと、あの時言われた言葉に少し悲しみを覚えました。世界の人口七十六億人。その全員が生活・考え・習慣・全てが違うものを持っていきます。誰一人、同じ人などもちろんないのです。相手は自分とは違う。悪い人ばかりではない。もちろん、自分とは合わない人もいる。そういうことを意識しコミュニケーションをとることで、相手の人権をしっかりと守ることが出来るのではないのでしょうか。そして、自分のあたりまえの違いに気付き理解しようとして少し心が動くはずです。

最近、そう改めて感じた出来事がありました。東京オリンピックで選手が行った抗議です。サッカー代表の多くの国の人達が人権差別に対する抗議として行った片ひびきをつくポーズ。女子砲丸投げでメダルを獲得してアメリカの選手が行った「抑圧

されたすべての人々が出会う交差点」を表す×のポーズなどです。世界でおきている人権をおびやかす問題については学校でも教えてもらったこともありましたが、改めてこの問題の撲滅を願うようになりました。今も昔もある問題の解決にはやはり一人一人の考えが大切になると思います。自分の間違いに気づき、振り返ることで人と自分とが違うのはあたりまえなのだと思いに落とし入れることができます。どんな立場にいつ立つことになるか分かりません。どんな立場にいつ立つことになるか分かりません。誰一人、傷つく立場に立つことがないようにするには、理解しようという努力と思いやりが必要不可欠です。一瞬にして相手に届いた言葉は思わぬ形で誰かを傷つけ悲しい時間を過ごさせてしまうかもしれません。